

NEWSLETTER

No. 20

2008年11月15日

会長 山梨正明 事務局 〒600-8268京都市下京区七条通大宮東入大工町125番地の1 龍谷大学
東森 勲 研究室内

TEL 075-343-3311 (代表) FAX 075-343-4302

psj.secretary@gmail.com

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

学会ホームページ: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/psj4/>

★ 会員の皆様、お変わりありませんか。日本語用論学会 Newsletter 第 20 号をお届けします。さる 9 月 21 日に、第 39 回運営委員会が開かれました。この号は、そこで討議された内容をもとに編集されています。

★ 副会長就任のご挨拶 久保進 (松山大学教授)

「自己調整 (自己との折り合い) と均衡失調について」

これまでの言語行為の研究は、主として、情報の伝達や解釈のあり方に焦点が当てられてきた。しかし、現在は、その前提ともまた帰結ともなる調整行為 (regulation) に光が当て始められている (cf. Kubo and Suzuki, 2007)。本稿では、自己調整の不成立に伴う均衡失調 (disequilibrium) の問題に調整行為の研究がどう関わるかについて私見を述べておきたい。

そもそも調整行為の研究は、Piaget や Vigotsky の研究に始まり、近年では、発達心理学において幼児の就寝前の独白の研究や母子コミュニケーションのあり方の研究において一定の結実を見せている (cf. Watson, 1989; Fogel, 1993)。

調整行為には、行為者自身が、自身を対象として遂行する **自己調整** (self-regulation) と、他者との関係において、自身を調整したり、相手に調整を求めたりする **対人調整** がある。人は自身が生活する上において、自身が置かれている立場や状

況 (つまり現実) と自分自身がこうありたい・こうであって欲しい・こうでなければならぬといった自身の願望・希望・夢・期待、いわば、**自己に関わるモダリティ**との間で、折り合いをつけながら生きている。このように自身で折り合いをつけながら生きることを自己調整と呼ぶ。例えば、次の談話では、現実の自分とそうありたい自分との間に折り合いが付けられている。この談話において、A は、毎日の貧乏生活にあくせくしている医療機器のセールスマンで、大学こそ出ていないが自分は頭がいいと思っており、株のブローカーであり高級車フェラーリに乗る身分の B にたいして嫉妬心を抱いている。A は B と違って、高級車なんぞもっていないから、下線部の A の発話は字義的発話内行為ではない。彼は、精一杯のジョークを相手に飛ばすことで、自身の折り合いをつけているのである。

A: Hey, you take care. I'll let you hang on to my car for the weekend. But I need it back for Monday.

B: Feed the meter.

[The Pursuit of Happyness[sic]]

ちなみに、B のせりふ “Feed the meter (パーキングメーターにコインを入れる→駐車場に車を休ませろ→少しは休めよ)” は後に、“and put your feet up (両足を机の上に上げて休ませろ→休憩しろよ)” がくる慣用句であるから、「まあ、あくせくせず、ぼちぼちやりなよ」は A の突っ張った対応を受け流しているといえよう。

ところで、自己調整は**均衡状態** (equilibrium)を確保するための手立てでもあるから、自己調整の対象となる**自身の現実とモダリティの間の乖離がはなはだしい**場合、自己調整機能は均衡を生まず**失調**をきたし、その結果、対人調整において、さまざまなトラブルを引き起こすことがある。いうまでもなく、この種の乖離を生み出す要因は多様であり、本人自身に由来する病理的障害や心理的・精神的障害などの内在的負荷と、対人関係に由来する精神的負担や、課題等により自身が現時点で経験している心理的・精神的負担などの外在的負荷、さらには両者が交錯した重層的負担が考えられる。

人は知的であればあるほど、自分の存在価値を他者に立証してほしくなる。例えば、専業主婦は、時として、自分が夫にとって家族にとって価値のある存在であることを示して欲しくなるのである。炊事洗濯といった家事（ルーチン）をするのは主婦の仕事と見なされがちだが、当たり前前仕事と見られその仕事に対する感謝の気持ちが示されなければ、家族の中での自分の存在価値というものを希薄に感じてしまう。次の JOANNA のケースも、まさにそれで、仕事に熱心なあまりに家庭を顧みない夫との生活に見切りをつけ離婚を選ぶことになるのである。彼女が、その結論を得るまでに、どれほど苦しんできたか、また彼女が、現在、どれだけ追い込まれた心的状態にあるか理解できていない TED は、下線部のせりふが示すように、ことばとは裏腹に彼女をとどめようとしている。少なくとも、少しでも話し合えば心のわだかまりが解け、彼女が出て行くのを思いとどまってくれると思っている。TED にすれば、これが彼にとってこの時点における精一杯の妻への歩み寄りであり、歩み寄りのための自己調整であった。その際、彼は妻からの、自分の歩み寄りに対する理解と、その結果としての彼女からの歩み寄りを期待しているのである。このような彼の妻への期待は、彼が彼女の失調を理解できていないことによる。彼女が極めて危険な失調状態にあることは、彼女の下線部のせりふで明らかとなる。彼

女は、「離婚できなければ現在の境遇を脱するには自殺を選ぶ」というところまで精神的に追い込まれているのである。

TED: (*stiffening*) What about Billy?

JOANNA: I'm not taking him with me.

TED: What?

JOANNA: (*tears start*) Ted, I can't...I tried...I really tried but...I just can't hack it anymore...

TED: C'mon, Joanna, you don't mean that. You're a terrific mother--

JOANNA: (*from her gut*) I am not! I'm a terrible mother! I'm an awful mother. I yell at him all the time. I have no patience. No...No. He's better off without me. (*unable to look at Ted*) Ted, I've got to go...I've got to go.

TED: (*desperate*) Okay, I understand and I promise I won't try and stop you, but you can't just go...Look, come inside and talk...Just for a few minutes.

JOANNA:(*pleading*) NO!...Please...Please don't make me stay...I swear...If you do sooner or later...maybe tomorrow, maybe next week...maybe a year from now... (*looking directly at him*) I'll go right out the window.

[Kramer vs. Kramer]

調整行為の研究は、均衡失調に陥っていると思われる行為者（失調者）の発話を含む談話の観察を通して、均衡失調がどのように対人調整に負の効果を生み出しているかを分析するとともに、対人調整における失調者の発話に特徴的な調整構造の分析を通して、失調者支援の糸口を探る。

最後に、まとめの代わりとして、調整行為の成功条件と充足条件を示しておこう。発話内行為にその成功条件や充足条件があるように、調整行為にも成功条件と充足条件がある。例えば、自己調整行為の場合、その成功条件は、(1)調整者は、自身の均衡状態を確保することを意図している（調整の目的）、(2)調整者が調整を行う立場にいる（達成の様式）、(3)調整者は自身の現状を把握している（予備条件）、調整者は自身に関わるモダリティを把握している（予備条件）、(4)調整内容は調整者にとって妥協できる範囲のものである（調整内容）、(5)調整に際し

ては自分の気持ちにたいして偽りはない(誠実条件)の6つの条件から構成される。この場合、成功条件の(2)が成り立たない場合は誤執行であるし、(3)が成り立たない場合は把握不全である。それ以外の条件が成り立たない場合は、欠陥(defective)のある調整である。また、その充足条件は、調整者自身の均衡状態が確保できていることに尽きる。そして、本稿の焦点である、失調はこの充足条件が満たされない場合に該当する。

参考文献

- Fogel, Alan. (1993) *Developing Through Relationships — Origins of Communication, Self, and Culture*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Kubo, Susumu and Mitsuyo Suzuki (2007) *Politeness and Regulation*. Kyoto: Koyo Shobo.
- Watson, Rita. (1989) Monologue, Dialogue, and Regulation. In Nelson, K. (ed.) *Narratives from the Crib*. Cambridge, Mass: Harvard Univ. Press.

《事務局より》

★ 第11回大会ご案内

日本語用論学会第11回大会は**2008年12月20日(土)21日(日)**松山大学 文京キャンパス 〒790-8578 愛媛県松山市文京町4-2
URL: <http://www.matsuyama-u.ac.jp/>で別紙のプログラムの要領で開催されます。

今年度は、ワークショップはグループ発表となり、20日の午後2件、21日の午前2件、**20日の午後13:00-14:30に会長(山梨正明氏)講演、21日の午後14:00-15:30に特別講演(Prof. Deirdre Wilson)があります。**20日の午後、21日の午前に研究発表30件が予定されています。ポスター発表20件は21日のお昼休みからとなっています。

大会発表応募総数は76件あり、ワークショップ4件、ポスター20件、研究発表30件が採択されました(なお、もう1件採択されましたが、海外から渡航費援助がもらえないという理由で辞退がありました)

【受付について】本年度より**会員番号**により受付をいたします。Newsletterの宛名シールに会員番号を明記しています。

【参加費(大会資料代)】

- ・ 大会参加費: 会員は2000円で、非会員は3000円です。
- ・ 受付は20日11時半から、21日は9時から開けています。開始直前が一番混雑しますので、お早めにお越し下さい。

【懇親会】

- ・ 会費: 4,000円(参加希望者は受付で、大会参加費と一緒に支払ってください。)
- ・ 会場: **カルフル 食堂** (大学構内)

【当日の昼食】 両日とも大学の食堂が利用できません。なお、お弁当は手配しておりませんので、各自ご持参ください。

【ホテルの紹介】 学会ではホテルの紹介はいたしていませんがホームページにホテルリスト上げてありますので参考にして下さい。学会ホームページ:

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/psj4/>

以下のページなども参考になります。

<http://www.jalan.net/>

【アクセス】 松山大学へのアクセスにつきましては、同封のプログラム、または松山大学のホームページ:

<http://www.matsuyama-u.ac.jp/> をご覧下さい。

[因みに、①JR松山駅からは、市内電車環状線の右回りで15分の鉄砲町下車、徒歩5分。②松山空港からは、空港リムジンバス(松山市駅行き)で20分のJR松山駅下車。あと①と同じ。JR松山駅と松山市駅を混同しないこと。]

★ 会費の振り込みについて

会費の振り込みにつきましては、未納の方は同封の振替用紙で11月末までにお払い下さい。振替用紙が同封されている方は、今年度分が未納の方です。同封されていない方は、すでに納入済みですので結構です。また、2枚同封されている方は、2007年度と2008年度の会費が未納の方です。学会の会計をご理解の上、未納の分も併せてお払い

下さい。なお、行き違いがある場合は、ご容赦下さい。会費の未納が2年以上になりますと、会員の資格を失うことになっています。

なお、今年度は、会費の徴収は、学会当日には行いません。未納の方は、上記同封の振替用紙にてお振り込みいただくか、当日、振り込み用紙を受付でお渡しますの、なるべく早くお振り込みください。新入会員の方にも受付で振り込み用紙をお渡しします。年会費は、一般会員：5,000円、学生会員：4,000円、団体会員：6,000円です（郵便振替口座 00900-3-130378 口座名：日本語用論学会）。

★龍谷大学学術講演セミナー特別講義

認知語用論(Relevance Theory)の Deirdre Wilson 教授による特別講義

発表タイトル：

Word Meaning and Communication in Relevance Theory

日時：12/19(金) 10:30-11:30

場所：龍谷大学大宮学舎、清和館 3 階
ホール：J R 京都駅から徒歩 10 分

内容：英国ロンドン大学で行われた認知語用論プロジェクトの研究成果

★故高原脩先生（神戸市外国語大学名誉教授）追悼

本学会の運営委員であり、神戸市外国語大学名誉教授の高原脩先生が、去る 6 月 21 日にご逝去されました。高原脩先生は神戸市外国語大学大学院で教鞭を執られた頃から、談話標識の分析など語用論を一貫して研究されていました。

1993 年 7 月に神戸で開催された International Pragmatics Association の Conferences では国際会議の中心となりご活躍されました。日本語用論学会 1998 年 10 月の設立当初から高原先生は本学会でも編集、企画など多方面で中心的な役割を果たしてこられました。特に、海外の研究者の招聘ではご尽力いただき、常にどの方に対してもやさしさを忘れず、閉じた語用論でなく、開かれた語用論というスタンスで、

語用論研究のすそ野を広げていくという貢献を日本でもされたと思います。ありがとうございました。先生のご冥福をお祈りいたします。（事務局より）

≪事業委員会の活動報告≫

事業委員会では、学会事業の一環として研究集会と研究会（SIG）を開催、支援しています。本年度の活動を以下に報告いたします。

（1）研究集会

「談話会」「講演会」という名の研究集会を定期的に開催しています。この集会は広領域にわたる語用論研究の分野の理解を深める場として、また、研究の方法やヒントを得る場として、そして講演者と議論を交わし会員同士が交流する場として、興味や関心を同じくする会員が知に溢れた時間を共に過ごすことを目指しています。

今年度は諸般の事情により談話会を開催することができませんでしたが、夏には、ハワイ大学の Kasper 氏を招いて第三回講演会を開催しました。内容は、ポライトネス現象を、会話分析のアプローチを用いて会話のなかで捉え、再考するというものでした。多数の参加者があり、盛会でした。これからも充実した集会にするため、会員の皆様のご協力をいただきたくよろしくお願いたします。また、テーマや講演者のご希望を事業委員までお寄せいただきますようお願いいたします。

（2）他学会、他研究会との共催

研究会の開催の他に、事業委員会は他の関連学会や研究会と講演やコンファレンスを共催しています。共催のメリットは会員の皆様が参加しやすくなるように参加費の免除や割引があることですが、他学会との交流を通して会員の皆様の活動の場が広がることを目指しています。

今秋、第 3 回共催講演会を下記の要領で共催することになりました。皆様のご来場をお待ちしております。

記

講師： Prof. & Dr. Yan Huang (The University of Auckland)

演題：“Anaphora, Generative Syntax, and Neo-Gricean Pragmatics”

日時： 11月19日(水) 16:30～

場所： 京都府国際センター会議室 (JR京都駅ビル 9階、伊勢丹内) 会費無料
URL: <http://www.kpic.or.jp/> (詳細は学会ホームページにも掲載しています。)

今後このような機会を増やしていきたいと思っておりますので、情報を事業委員までお知らせいただきますようお願いいたします。

(3) 研究会グループ (SIG)

現在 3 件の研究会グループが活動しています。今年も研究の成果が、松山大学で開催されます第11回大会のワークショップで、発表される予定です。グループの発足を希望される方は、ホームページにあります規定をご一読の上、ご応募いただきますようお願いいたします。

<<新刊書紹介>>

ロビン・カーストン (著) 内田聖二・西山佑司・武内道子・山崎英一・松井智子 (訳) (2008) 『思考と発話：明示的伝達の語用論』 研究社。

児玉徳美(2008) 『ことばと論理』 開拓社。

小泉保(2008) 『現代日本語文典：21世紀の文法』 大学書林。

山岡政紀(2008) 『発話機能論』 くろしお出版。

岡本真一郎 (編) (2008) 『ことばのコミュニケーション：対人関係のレトリック』 ナカニシヤ出版。

田中典子(2008) 『プラグマティックワークショップ：身のまわりの言葉を語用論的に見る』 春風社。

中島純一(2008) 『コミュニケーションと日常社会の心理』 金子書房。

ジョン・R・サール (著) 宮原勇 (訳) (2008) 『ディスカバー・マインド！ 哲学の挑戦』 筑摩書房。

滝浦真人(2008) 『ポライトネス入門』 研究

社。

森雄一・西村義樹・山田進・米山三明 (編) 『ことばのダイナミズム』 くろしお出版。
Ariel, Mira (2008) *Pragmatics and Grammar*. CUP.

Keckes, Istvan & Jacob Mey (eds.) (2008) *To appear) Intention, Common Ground and the Egocentric Speaker-hearer (Series in Pragmatics)*. Mouton De Gruyter.

《一部解説》

Ariel, M. (2008) *Pragmatics and Grammar* (CUP)は、語用論と文法現象の関わりをわかりやすく解説しており、Part I: Drawing the pragmatics/grammar divide. Part II: Crossing the extralinguistic/linguistic divide. Part III: Bringing grammar back together と、新グライス学派、関連性理論などで扱われた推意や and の話題にのみならず、談話にまで目配りがいきとどいている。Cambridge の textbook in Linguistics として出版されており、大学院などのテキストとしても恰好の書と思われる。(田中廣明氏より)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

★ 編集後記

ニューズレターは、前号まで、編集の方でニューズレター原稿を作成し、事務局が印刷し、見開きに折り合わせ、袋詰め、そして発送をしてきましたが、今回から、事務局に集中する仕事量軽減のために、見開きに折り合わせる部分と発送の簡便化を図っております。もちろん、簡便化を図つつも、これまでのニューズレターの特長をさらに伸ばそうという点で、合意しております。会員の皆様には、ニューズレターに関するご意見やご要望等ございましたら、事務局あるいは編集までお知らせいただければ幸甚に存じます。よろしく願いいたします。

では、多くの皆様と松山の学会でお目にかかるのを楽しみにしております。

(ニューズレター編集 中村芳久)